

はじめに

本書は2001年から20年にわたって私が取り組んできた、デンマークにおける障がいのある人たちの暮らしと社会的支援に関する調査のまとめです。本書の目的は、障がいのある人たちの幸せを生み出すための社会的条件や仕組みについて考察し、明らかにすることにあります。デンマークを含む北欧の国々は現在、障がいのある人だけでなく、社会的な理由によって様々な困難を抱える人たちの問題解決に取り組んでいます。介護だけに限定しない高齢者の生活支援、言語・宗教・文化・社会的通念が異なる移民への支援、LGBT（レズ、ゲイ、バイセクシユアル、トランスジェンダーなど）の人たちに対する差別の撤廃、アルコール依存症の人の治療と社会再参加、貧困の根絶などマイノリティ（社会的少数者）を中心として不幸な状況にある人を置き去りにする社会のあり方に疑問を投げかけ、誰もが幸せになるための条件づくりに取り組んでいるのです。

そのことも影響して、ノーマライゼーションという言葉は、その言葉を生み出した国であるデンマークではこの20年来ほとんど使われていません。現在も価値ある思想であることに変わりはありませんが、デンマークではソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）という言葉が積極的に使われるようになっていきます。

そのため本書では、ノーマライゼーション、ソーシャル・インクルージョン、そしてダイバーシティ（多様性）をキーワードにして障がいのある人の社会的支援を分析、考察していきます。こうした専門的な言葉は本書のなかで解説するか、あえて直接的に使用せずにその内容がわかるように説明していますので、知らない言葉であってもおそれずに安心して読み進めてください。本書は研究書として出版しましたが、初めて読む人にも理解

できるように、可能な限り平易な言葉を選び、図や写真を多く掲載してわかりやすく書き進めています。

本書では、ノーマライゼーションからソーシャル・インクルージョンへと至るデンマークがたどった経緯を意識しながら、施設解体のその後、グループホームでの暮らし、大型施設（コロニー）の存続など、生活支援の変化の様子を紹介しています。障がいのある人の生活支援の形態は一般市民の生活形態を基盤にして展開されています。しかし、言語も宗教も文化も異なる移民も、生まれながらの性にとらわれずに生きようとする人も、その他の様々な生活課題をもつ人も、違いを認め合う多様性のある社会集団を創りあげていくためには、新たな視点での支援の枠組みが必要になってきています。

多様性のある社会とは、誰もが生活しやすい基本的な生活基盤を共有したうえで、違いを違いのままに認め合い保障する社会を新たに築くことです。誰にとっても使い勝手がよい社会的な基盤をつくることは、誰にとっても多少の使いづらさが残ることもあります。それは結果的に生活課題をもつ人には使えない、あるいは使にくい社会的支援を生みだすこととなります。だからこそ、それぞれにフィットするように柔軟で個別的な配慮が必要になるのです。つまり、共に生きるということは多数者の世界に少数者を迎え入れるという単純な方法では成しえないということです。場と時間と空間の共有の方法について、共有しなくてもいい場合も含めて吟味することが求められています。「共に」という言葉の意味内容についてしっかりと吟味しなければなりません。

本書で重視したいことは社会的支援の本質の究明です。一過的な支援の傾向や福祉予算として振り分けられる財政規模の多寡ではなく、民主主義を培ってきた人々の努力やものの見方・考え方について考察していきます。興味関心のある章から読んでいただければいいのですが、第4章は国と自治体の関係や行政組織について解説しているので、そこから読むことで他の章の理解が進むかと思えます。また、デンマーク語を日本語に置き換える際には、真意や実態を損なわないように配慮し、読者の皆さんにとってわかりやすく翻訳しています。

各章の内容は次のとおりです。

序章では、ノーマライゼーションやソーシャル・インクルージョンが民主主義を具体化するための方策であることを指摘しています。日本の社会や世界的にも広がる不寛容な社会を克服する道すじについて考察し、デンマークから何を学ぶべきかについて提案しています。

第1章は、北欧で取り組まれてきた施設「解体」の現実について説明しています。デンマークでは施設は完全に解体されたわけではなく、重度障がいのある人たちに対しては小規模化された施設が残されています。その経緯について説明し、何が大切にされているのかについて述べています。

第2章では、この20年ほどの間に充実してきた地域生活について説明し、概念化しています。施設を出て地域で生活しても、質の高い生活を送るための条件がなければ暮らしは貧困なままです。地域で質の高い生活を送るための条件とは何かについて説明しています。

第3章では、デンマークに今も残る大規模施設（コロニー）を5回にわたって聞き取り調査し、残されている理由や支援の状況についてまとめられています。施設を旧態依然としたまま残すのではなく、時代状況に即して住まい方の改革を行っています。そこで大切にされているものが何かを知ることによって、施設の役割を見つめなおし改革の方向性を見定めています。

第4章は、国の行政機構、行政システム、そしてコミュニネ議会について説明しています。特にコミュニネ議会のあり方を知ること、デンマークがいかにして民主主義を具体化しているのかを理解していただけるものと思います。ワークライフバランスの実現も男性の育児参加も個人的努力や意識のもち方の問題としてではなく、労働条件や社会システムのあり方の問題として理解すべきことを提案しています。

第5章は、障がい者団体の運動と活動について、障がい者の親の会（LEV・レウ）と当事者団体（LOBP

A・ロパ）を取り上げて紹介しています。デンマークの障がいのある人の生活水準の高さが要求運動によってこそ実現してきた事実を理解していただけるはずです。

第6章は、人権としての性の支援を取り上げました。性の支援は特にプライバシー（私生活に関する個人の自由や権利）や人間理解に深く関わることにだけに、日本では障がい者支援に携わる専門家からも無視や軽視をされる課題です。恋愛と性を権利として理解するデンマークの取り組みは、セックスカウンセラーによる性の支援やグループホームでの恋愛の支援を実現させています。

第7章は、日本人の多くがもつ自立観を批判的に吟味しつつ、デンマークの障がいのある人の生活実態から確認できる自立のありようを概念化し、考察しました。それは支え合うことを内包する自立観です。試論的ではありますが、多くの人が達成しえない自立観を排し、生活現実に即した自立観を定義しました。

終章は、障がいのある人たちだけでなく誰もが幸せになるための社会的諸条件について検討しています。国連やOECDの幸福度調査を紹介しつつ、なぜ日本は幸福感をもてない人が多いのか、なぜデンマークは幸福度が高いのかを検討しています。日本では法制度によってマイノリティを排除してきた仕組みにも触れながら、心のありようは社会的な生活や具体的な権利を支えることを通して定まっていくことを指摘しています。

皆さんと共に障がいのある人の、そして私たち自身の幸せを考えるデンマークの旅に出発しましょう。

2020年7月

小賀 久